

先生特集について

東海の教育を直接支えて下さっているのは、ご存知の通り個性豊かな優れた先生方。そんな素晴らしい先生方をご紹介し、より深く東海を知っていただくという企画です。

前半：生い立ち～趣味

中間：教務として、教員として

後半：顧問として～父母懇活動

いつき 杉浦一輝先生

高校数学科 教務部長

オーケストラ部・

釣り同好会 顧問

東海25年目

愛知県西尾市出身

2019～2020年

東海父母懇教員代表

モットー 「つらい時ほど笑顔であれ(笑)」



小学校 サッカー部・ソフトボール部

料理やお菓子作りの研究も

中高 吹奏楽部

トランペットに出会う

大学 東京の大学へ 理学部数学科

教員になりたかったわけではなかったが、
塾講師のバイトで考えが変わっていく

大学院 数学をもう少し研究したかった

教員になると決め、縁あって東海へ

父母懇では前教員代表として、学校行事では教務として、そしてオーケストラ部顧問としての姿を目にしている方も多いのではないのでしょうか？そして、多くの地域の地域懇やオータムフェスでお話されている姿を覚えている方も多いことでしょう。杉浦先生が

教員代表の時代にコロナ禍となり、父母懇活動を継続し活性化することの重要性を改めて強く感じ、広報部を立ち上げられました。「T.F. Letter」もその一環で創刊されたのですが、「先生特集」企画にも強力で後押しをしてくださいました。「先生特集を一番読みたいと思っているのは、実は僕」とおっしゃるくらい、先生方の新たな一面を毎回楽しみにしているそうです。取材を申し込んだときは頑なに「僕はつまらない人間だから」と断られましたが、2年越しのお願いで、満を持しての掲載です。(取材日12/23)

—生い立ち～東海の教員になるまで

愛知県西尾市出身で在住。3人兄弟の一番上。両親ともに高校教員(父数学、母英語)で、祖父、妹、義弟も教員。教員一族に生まれ育った。当時、親に「あなたの周りにいる大人は教員ばかり。教員以外の大人を知らないから世間知らずだ」とよく言われ、確かにそうだと感じていた。両親の影響もあり、小学校の頃は将来の職業として「教員」を少し意識していたが、高校時代に両親が色々苦勞しているのを見て、「教員って簡単にやりたいって言えない仕事。なりたいたなんておこがましい」と感じ、高校卒業時は「教員には絶対ならない」と思っていた。大学は、親に「地元にとどまっていたはダメ。世間知らずだからきちんと大海を見てきなさい」と言われ、色々厳しい親元から離れたかった思いもあり、東京の大学へ進学した。大学時代は、両親も自由にさせてくれて、親と離れることにより親の有難さも感じ、感謝の思いが強くなった。進学した数学科では、コンピューター系、銀行系、教員の3つの進路に進む人が多かった。コンピューターは正しく指示すれば、きちんと返答してくれるが、結局こちらが指示したことしか返ってこない。一方、アルバイトの塾講師で、こちらが思ったようには全く動かな

い、何を考えているのかさっぱり分からない小学生を相手にし、「人間って面白い」と思ったことが、教員という進路を改めて考え始めた一番の理由。自由にのびのびした環境にあると思われる学校の採用試験を幾つか受けて、最初に声をかけてくれたのが東海。そんなご縁で人生の半分の25年間、東海で過ごしている。

一 小中高時代はどんな子どもでしたか？

東海生にもよくいるタイプで、学校では良い子、家では結構悪い子。親が厳しくて、それに対する反抗もあった。僕は面倒くさがり屋で、どうやって要領良く生きていくかを考える中で、数学的な能力を身につけていったように思う。小学校の頃から熱血広島カープファン。中高時代は吹奏楽部で、トランペット一筋だった。クラシック好きの母の影響で自分も音楽に興味を持ち、東海に就職した時も音楽系のクラブに携われるといいなと思っていた。楽器を買ってもらったのは中学3年生。なかなか自分から「買って」と言えなかったが、ある時親から声をかけてくれて買ってもらった。これが人生で一番印象に残っている親からのプレゼント。

一 大学時代の他のアルバイト

大学時代に塾講師や家庭教師に加えて熱心に取り組んだのがイベントスタッフのアルバイト。マイケルジャクソンからドリカム、サザン、そして無名な頃の安室奈美恵まで、100以上の様々なコンサートに関わった。舞台を作るところから接客までなかなか酷なバイトだったが、イベントが多い東海での教員生活に、その時の経験が大いに活かされているように思う。

一 料理の腕

母は料理があまり好きではなく、手伝いと称して小学校時代から台所に立つ機会が多々あった。ただ、母が凄かったのは本当に褒め上手であったこと。どんな料理でも「おいしい、おいしい!」「すごいね!」と言いながら食べてくれた。男の子というのは単純で、褒められて調子によって色々料理をするようになった。もともと創作活動は好きで、甘いものは好きではないのに、スポンジケーキやアップルパイ作りにも小学校時代に取り組んでいた。今でも仕事でどんなに遅く帰っても、晩御飯は自分で買い物をして自分で作っ

て食べたい。閉店間際のスーパーに行って「今日は何がお値打ちかな?」と思いながら買い物をして作って食べるのが好き。和洋こだわらず何でも。



左上:シーフードサラダ

右上:オータムフェスの屋台

左下:アジのなめろう

右下:アクアパッツァ

一 休みの日のリフレッシュ方法

家でじっとしていることはなく何かに取り組むタイプ。最近なかなか行けないが、ベストはやっぱり釣り。「キャッチ&リリース」ではなく「キャッチ&イート」派。釣ったばかりの新鮮な魚は本当に美味しい。スーパーの魚とは全く違う。生きた状態で持ち帰って捌いたカワハギの肝は絶品。自分が休みに求めるものは、料理や釣りなど「自然」なもの。東海生は突然想像もつかないことをする。それに対応するのは楽しいけど、それだけでは疲れてしまう。釣りは大自然の中で魚とのやりとり。料理は火加減と味付けて自分の思い通り。たぶん東海とは違う何かを求めているのだと思う。

一 教務部長

部長と言っても基本的には雑用係(笑)。東海では教務部は何かを決めるのではなく、学校の行事や日常のスケジュールがきちんと回っていくように段取りする部署。雑用も嫌いではないが、やっぱりどちらかというと担任の方がやりたい。

一 仕事を采配すること

(杉浦先生は采配が上手ですよ。)自分ができない事はもちろん人に振る。自分ができる事も、極力人にやってもらいたい。東海生は言ったように動くかという、そうはいかない。だから上手に「活かしたい」。父母懇の世界も一緒に、最近では教員に対しても

同様になってきた。教員、父母、生徒、それぞれの良さがきちんと引き出される状況や環境であって欲しい。

僕が東海に来て一番面白い、楽しいと思ったのは、自分の想像を遥かに超える何かが起きること。自分が上手に導く必要はない。導いたら所詮導く側が思っているところまでしかいかない。やるかやらないかを決めるのはもちろん相手だが、遠慮せずとにかく何でもやってみて欲しい。特に学生の中に沢山の成功体験と失敗体験をして欲しい。何もないというのが一番もったいない。最近は生徒も合理主義で無駄を省こうとする。それも大事だけれど、本当に大事なことを見抜くためには、中高時代にいかに無駄なことをするかが大事だと思う。東海生は自分の意思で真剣に取り組み始めたとき、とんでもない成果を上げる。最近、言われたことを素直にやる子が非常に増えてきているが、逆にそれは心配なことでもある。やっぱり東海生というのは自分で考えて、自分の思いで、たくましく生きていって欲しいし、東海はその環境が整っている学校であり続けて欲しいと思う。

一浄土宗の学校

考え方も含めて1つの象徴。今年度、学習指導部が宗教の授業にフォーカスしてくれた。浄土宗を通して命の大切さや物事の真理をきちんと教えてくれていることが今回改めて分かった。東海は色々な生徒が色々な方向を向いている。そこを浄土宗が大きく包み込んでくれるような状況が望まれる。浄土宗はそういう役割を果たせるものだと思っているし、生徒の人間教育にもっと働きかける存在であってほしいんじゃないかと思う。

一生徒に伝えたいこと

東海に就職して1年目に中1と中3を担当して「面白い生徒たちなのに、本当に残念」と強く感じた点がある。それは人の悪いところをすぐに見つかること。色々な理由があると思うが、心にゆとりがない表れだと思う。人と比較して、相手の良いところを自分に活かすのならいいけれど、ただか中高生で相手を蔑み自分の存在価値を見出す必要はない。だからそれ以後毎年言っているのは、「人の良いところを見つけられるようになりなさい」。面白いもので高3になると人間形成されてきて、ようやく周りの人を客観的に見られるようになる。例えば、中学校時代に勉強のできる子たちを「あいつは宇宙人だし」と言っていた子たちが、高3になると「やっぱりあいつは凄い。どうしたらあんなれるんだろう」に変わってくる。それが大切なこと。いかにそれを引き出せる環境にするか？ そのためには子どもたちに言葉で伝えるだけではだめで、まずは彼らが気持ちのゆとりを持てるようにすること。そして周りの大人が見本となるべく子どもたちの良いところを探して、見つけて、育ててあげること。東海生の良い所を探すとキリがない。でも面白いことに、悪いところを探してもキリがない。だからどこを見るかは本当に大切。自分の周りにいる個性豊かで魅力あふれる東海生の良いところを素直に認められて、そこを自分に取り入れようとしてくれば、もう何も言わなくても子どもたちは成長していく。東海という素晴らしい環境を大いに活かし、たくさんの友人と切磋琢磨しながら様々な成功体験と失敗体験を積み重ね、その中で人のいいところを見つけられる人に成長していかれることを願っている。ただし、これは一筋縄ではないとも根気のいる取り組み。

一大人にできること

僕が父母の皆さんによく言っているのは、「親は背中を見せるしかない」ということ。東海は個性豊かな生徒たちが思い思いに様々な取り組みをしている学校だけど、それは東海に関わる大人がそういう人たちであるから。東海生は良くも悪くも教員の生き写しだとよく感じる。そして彼らは親もよく見ているから、親が



左:カワハギ釣り(愛知県)



右上:釣った魚は全部捌く



右下:アジのサビキ釣り

どういう人であるかも大切。我々大人は子どもがなつて欲しいように少しでも行動できたらいい。その行動が、学校の環境を作りだす。東海生は、自分のことばかり考えているようで、実は周りをよく見ているから、環境の影響を大きく受けている。

一クラス担任

もちろん数学は嫌いではないが、僕はそこまでマニアでもない。だから数学ができない子の気持ちもよくわかる(笑)。なんのために数学をやるのか自分も考えていたから、数学の意義を生徒に語るのは面白い。ただやはり、教科担当にできることは限られる。でもクラス担任はちがう。中学担任の頃は、「学習習慣、生活習慣を確立させる」「約束を守る」「人を傷つけない」…そういう基本的なことを強く意識していた。中学生はどこまでやっていいかを試しているところもあって、周りの大人はブレずに付き合うことが大切。僕は彼らが高校に上がる前から「高校になったら自分のことは自分で判断して行動できるように。中学の間はまだ予行練習。僕も君たちに色々言うよ」と伝えながらも、徐々に判断を任せ始める。東海生は任せられるのが好き。信頼して任せてもらおうと頑張る。ただし放置すると面倒な方向に行ってしまうので、見守ることも中学生には必要。高校は自分の道をきちんと歩んでいく子が増えてくるので、歩みやすい環境作りと、人を活かす取り組みを心がけていた。クラス担任をしている時、僕が一番注視していたのは、隅の方で一生懸命掃除しているような生徒。そういう陰でコツコツ頑張っている子をきちんと評価する担任でありたい。



初夏のつどいで講演
東海の「皿回し理論」を実演

彼らと隅の方で「一緒に頑張ろうな」って言いながら日陰でにこにこしながら生きていきたいと実は思っている。願わくは、残りの教員生活で中1から高3まで担任として持ち上がりたい。中1の入りたての子たちと共に歩む時間はとても魅力的。人間教育は生徒との

関係も大切だと思っているから、中1から時間と経験を一緒に積み上げていきたい。以前はお兄さんの感覚でいたけど、今は残念だけとお父さん以上の年齢。生徒には鬱陶しがられるかも(笑)。

一東海の良いところ

東海が一番好きなところは「ものさし」がたくさんあるところ。こうでなければならぬ、ということはなく、これもあり、あれもそれもどれもあり。そして別に今うまくいなくても、成果を出すのはいつでもいい。その子がやろうと思った時にやれるようになってくれればそれでいい。今だけを見るでもない、一つのものさしで測るでもない、そんな環境であって欲しい。

一オーケストラ部の顧問として

オケ部の取り組みに正直最初は戸惑った。自分が学生時代に経験した吹奏楽部は、教員の指導者が入ってテンポや音程を細かくチェックして、コンクールを目標に緻密な音楽に仕上げた。東海オケは生徒主体で、とにかく生徒が自由に音楽を楽しんでいる。オケ部の創始者の西村先生は、熱心な生徒も熱心でない生徒も、どんな生徒もとにかく大事にしていた。なかなか練習に来ない生徒がどうしたら東海オケが居場所になるかを真剣に考えていた。今でもその取り組みが引き継がれている。当時から今も続けているのは、練習計画から音楽指導、そしてクラブに関する決定は全て高校2年生が行うこと。東海生は言うこと聞かないから、高2の1年間は本当に大変。ただ、苦勞する高2も数年前までは先輩を困らせていた後輩であったわけで、文句を言わずそこに向き合えない。100名近いクラブの運営は一筋縄ではないが、そこでどんどん失敗を経験し、学んでくれればいい。合理化や成果ばかりが求められる世の中になりつつあるが、生徒が失敗できる場所を作っておくことも重要なことだと思っている。定期演奏会本番の華やかな舞台に至るまでには毎年紆余曲折の連続だが、苦しい環境の中で生み出された音楽は間違いなく「自分たちで創り上げた音楽」だと言える。このように苦勞の末に達成感を得る経験ができる場所はすごく貴重。顧問が言うからではなく、仲間と共に自分

たちで話し合っって考えて取り組むことが何よりも尊い経験になる。顧問をしてもう一つよく感じるのは、子どもたちの限界をこちらが決めてはいけないということ。無理だと思ったことも、彼らはやり遂げてしまう。実は東海においては親も教員もそう。対生徒、対親、対教員に限界を決めつけることをしては失礼だと感じる。それくらい東海には優秀な人材が揃っている。その人材を埋もれさせずにいかに花咲せるかが大事。

一父母との関係の築き方

昔は父母が本当に苦手だった。中学1年生の担任になった25歳の僕が、立派に子育てをしている東海のお母様方に何が言えるんだろうと思い、父母が怖かったし、PTAは毎回汗だくだった。でも、結果的には苦手なはずのお母様方にここまで育ててもらった。一番感謝しているのは、父母は決して敵ではなく、子どもたちが健やかにたくましく育て欲しいという共通の思いを持った味方だと教えてもらったこと。僕がそうであったように、クラス懇や地域懇は実は教員にとっても貴重な成長の機会だと感じる。父母の皆さまにお願いなのだが、若い教員にとって地域懇はハードルが高いので、一緒に連れ出していった時に、「父母って怖くないんだ」と思わせてほしい。そういう意味でも僕は父母懇を頑張っているつもり。余談で、もう一つ良かったのかなと思うことは、僕はこれまで「つらい時ほど笑顔であれ」をモットーとしてきたが、これが親との良好な関係を築くことに結構有効だったこと(笑)。

一地域懇談会

地域懇は、父母に安心と楽しさと広い視野を提供する、東海の教育には欠かせない機会。そして教員にとっても貴重な成長の機会になっている。僕はこれまで単純に計算しても100回以上地域懇に参加してきたが、そこで聞いた先輩の先生の話、OBの話、そして

父母の方々の率直な話が、世間知らずの僕を大きく成長させてくれたと強く実感している。だから若い先生方も、ぜひ地域懇談会に参加してもらいたい。何よりも貴重な成長の機会になると思う。学校は子どもが成長する場所だが、東海は生徒と共に親や教員も成長できる場所。その1つの象徴が地域懇談会。だからこの地域懇談会はこれからも大切にしていきたい。

一T. F. Letterで先生インタビュー企画について

授業の話や生徒の反応からも、この先生は絶対に何か面白いものを持っていると確信できる東海の先生はたくさんいる。このT. F. Letterの企画は、父母がインタビューでそんな先生方の魅力を引き出し、学校の環境づくりにも大きく貢献している素晴らしい企画だと感じている。教員生活の中だけではなかなか分からない先生方の思い、こだわりが本当によく分かる。No.21の鈴木健司先生は、経歴や普段の教員生活からとても面白い人だとは感じていたが、インタビュー企画で様々なことがつまびらかになり、ますます魅力的に感じられるようになった。また、No.26の折井先生が文化講座の時に「僕の思いや考えていることはT. F. Letterのインタビューを読んで貰えば分かりますよ」とおっしゃった言葉もとても印象的。(このインタビューに参加したNo.6の北村先生は、「自分のことを1時間半くらい語る機会はなく、父母にいろいろ聞き出してもらうと、終わってみたら自分はこういう人間だったんだって知ることできて新鮮だった。下手な学校紹介より、これを読んでいただいた方が学校や先生の思いがすごくよくわかると思う」)そしてT. F. Letterはデータ化され、いつでも見られることも大きなメリット。日本広しといえど、父母がこんなに学校に関わる学校は少ない。父母が子どもと接点のない先生にインタビューするとか、一般では考えられないこと。東海にきたら、人のご縁を大事にして欲しいと思う。



編集後記

常にパワフル。頭は超速回転。人をその気にさせる(?)天才。常に笑顔。それが余裕の笑みに見えて、親近感と安心感があります。揺らがない信念と独特の柔らかさを持ち合わせた素晴らしい先生です。完璧なインタビューでした!